

2018 年中等社会科教育学会（11 月 18 日）

●自由研究発表 第1分科会（10：00～12：00）

1 番目の発表は、佐藤光一氏（筑波大学大学院）の「『歴史の脱構築論』に基づいた歴史学習の可能性—歴史用語の捉え直しを図る学習形態—」という題目の発表である。資質・能力の育成にも寄与できる学習形態を構想すること、学習展開において「事実としての歴史」を探究する姿勢を挫く危険性という歴史相対主義の課題を克服する手立てを生徒に身に付けさせ、歴史解釈・認識の主体として育成すること。この二点に注目して報告者は、「歴史の脱構築論」の理論の整理、歴史学習への応用として自己内対話をういた学習モデルの開発の発表を行った。会場からは、現場ではどのように行っていくのかということや、一次史料と二次史料の取り扱いについてなどの質問が挙げられた。

2 番目の発表は、渡辺裕明氏（筑波大学大学院）の「切実性を持たせる社会科防災学習の展開—高校生の防災意識に関する調査をもとに—」という題目の発表である。高校生の防災意識に関するアンケート調査の結果から、災害への備えや対策の必要性を感じていない生徒が多いという実態を踏まえ、学校の授業等で災害教育を取り入れる必要性を指摘した。その上で、災害を生徒にとって切実な問題であると捉えさせるために、①生活圏をフィールドとした教材の導入、②思考させる「問い」と活動に向かわせる「問い」の設定、③災害時を想定した体験活動の3点をもとに、防災学習を構想していく上での方策を提示した。会場からは、総合的な学習の時間における防災学習と社会科における防災学習の違いや、防災学習を構想する際に軸とした科目についての質問が挙げられた。

3 番目の発表は、竹田和夫氏（新潟県立新発田高等学校）の「歴史教育における考古学の可能性—主体的な学び及び合教科の実践を中心に—」という題目の発表である。学習指導要領改訂の核となる「主体的・対話的で深い学び」を、考古学の授業で取り入れる試みを紹介した。考古学の成果の活用に基づいた、生徒が問いと仮説を立てる授業実践を提示し、考古学と高校教育の連携の可能性を示唆した。会場からは、考古学を授業に取り入れることにより生徒に身に付けさせたい力はどのようなものなのかということや、新潟県における博学連携の実態などについての質問が挙げられた。

（文責 宮坂幸恵・李花子）

●自由研究発表 第2分科会（10:00～12:00）

1 番目の発表は、小林かおり氏（筑波大学大学院）の「倫理的消費者を育成する中学校公民的分野カリキュラム開発—「食品ロス」を軸にした消費者教育の観点から—」という題目の発表である。高度経済成長から近年の異常気象を経て、消費活動の在り方の問い直しが始まっている今日の現状を踏まえて、本報告では、生徒自らが「持続可能な社会」の実現のため、「食品ロス」という問題を切り口に考える、倫理的消費者になることを目標とした消費者教育の観点を含む中学校公民分野のカリキュラム開発の発表を行った。会場からは、食品ロスと人権の単元との繋がりについて、家庭科教育との関係性などについての質問があり、生徒自身の生活から食品ロスを見直す必要性があるという指摘もあった。

2 番目の発表は、大脇和志氏（筑波大学大学院）の「社会科教育における選挙—高等学校教科書に見られる2つの「政治」に注目して—」である。本報告では、同一出版社の4つの時期の「現代社会」の教科書を計量テキスト分析した結果、教科書の構造として「選挙」が政治領域の中核的な語になっていること、そして現実の政治状況を踏まえた内容の改訂が行われていることなどを明らかにした。会場からは、教科書を客観的に示すことへの意義や、比較を通してわかる教育的な有効性とはどのようなものかということなど教育学に対する示唆についての質問があった。

3 番目の発表は金田啓珠氏（山形県立長井高等学校）の「野外調査を生かした探究的な学びの実践」である。野外調査を教員の解説中心の社会科見学に終わらせるだけでは不十分であるという問題を踏まえて、本報告では、見学地での解説を生徒に割り振り、各自で探求させることによって、生徒が主体的に参加し、地域の課題や解決策を探るだけでなく新しい価値を発見し、地域に還元できるような姿勢を育むことを目標とした実践の報告が行われた。会場からは、フィールドワークで学ぶことと文献から学ぶことの違いについて、実践から学んだことをどのように社会参画に繋げるのか、という点について質問があった。

4 番目の発表は小貫篤氏（筑波大学附属駒場中・高等学校）・石井英俊氏（筑波大学附属駒場高等学校3年）の「公民科「課題探究」の取り組み—世田谷区の街公園活性化の区民への影響の検討—」である。高等学校公民科では、社会的課題について探求する学習が行われてきたが、社会的課題は教員が提示するのが常であった。新学習指導要領における「公共」の大項目Cでは、生徒が自分で社会的課題を発見し追究することが求められている。そこで本報告では、

高校生がどのようにすれば課題を発見し、探求する主題を設定できるのか、また、どのような指導があれば高校生が探究を進めることができるのかということを実践の報告を通して明らかにした。会場からは、自分で主題を設定できる生徒もいるが、生徒が解決不可能と思われるような主題を設定してしまったとき教員はどのようなタイミングで介入すべきなのかということや、この研究を通して自分自身（生徒自身）にはどのような変化がみられるようになったのかなどの質問があった。

（文責 須藤隆也・西川有理）

●模擬授業「イギリス産業革命と労働問題」（13:00～14:15）

模擬授業実践者は、永吉航・宮坂幸恵・李花子・渡邊和彦（筑波大学大学院）の4名である。本報告は、授業者らが茨城県の県立高校で行った授業実践の報告であった。授業名は「イギリス産業革命と労働問題」であり、イギリスにおける産業革命の進展のなかで、「どのような労働問題が発生したのだろうか」という問いを中心に、18世紀のイギリスにおける資本家と労働者の関係を探る授業が報告された。本授業の大きな特色は、授業者みずからが開発した「産業革命ゲーム」にある。このゲームは、資本家の立場から、子ども・女性労働者・熟練労働者・非熟練労働者のうち、それぞれを何人雇うかを考えるロールプレイングゲームであり、勉強に苦手意識をもつ生徒たちに労働という問題を具体的に捉えさせ、史資料の読み取りを深めるという意図のもとに導入されたものであった。

授業報告後の質疑応答では、主にこの「産業革命ゲーム」をめぐる議論がなされた。そこでの議論は、おおむね次の三つの論点に整理できる。第一の論点は、「産業革命ゲーム」に十分なゲーム性があったか、という点である。このゲームで用いられていた史資料やゲームの設定がきわめて単純であり、「これは本当にゲームと呼べるのか」との批判がなされた。第二の論点は、このゲームによって当時の人々の労働環境まで捉えられるのか、という点である。労働者の置かれている環境のみならず、資本家の置かれている環境をも考慮して授業をつくらなければ、労働問題を真に捉えることは難しいのではないかと指摘がなされた。第三の論点は、「女性」の捉え方が適切であったか、という点である。ゲームの中では、「女性は手先が器用である」との意見が多く出たが、そこには偏見が潜んでいるのではないかと、そうした偏見を正すことなく見逃してしまっても良いのか、との指摘がなされた。

（文責 野口貴大）

●シンポジウム（14:30～16:30）

テーマ：高校新科目の可能性と課題

今回のシンポジウムは、「高校新科目の可能性と課題」をテーマに、高校の社会系科目の役割、地理と歴史と公民の連携を主な論点として議論するものであった。「地理総合」を泉貴久氏（専修大学松戸高等学校）、「歴史総合」を中尾敏朗氏（群馬大学）、「公共」を山本智也氏（筑波大学附属駒場中・高等学校）が発表された。なお、コーディネーターを唐木清志氏（筑波大学）、コメントーターを井田仁康氏（筑波大学）が務められた。発表では新科目創設の背景と具体的内容、期待される授業実践、課題が整理された。

三者の発表を概括すると、「地理総合」、「歴史総合」、「公共」は総じて、現代的な諸課題解決に向けて生徒が主体的に解決策を構想、社会参画することを目指すものである。新科目創設の背景には地球規模の課題、国内や地域の課題からなる社会のニーズ、各科目に関する個別的な課題、現代的な教育課題への対応等がある。授業実践例としては、生徒にとって身近な題材や論争的な問題を扱い、種々の問いの設定を通じて内容を探究し、解決策を構想するものが示された。課題として、授業時間の確保、評価の仕方、教員研修の場をいかに確保するか、小・中・高の連携、生徒の資質・能力を育てる現場のノウハウ向上、単元構成のあり方、科目間連携、大学入試をはじめとする各種試験への対応が挙げられた。

発表を受けて井田氏が、各科目の役割と連携に関する内容を問うた。主なものとして、泉氏には、何ができたら「課題解決」達成か、歴史・公民に何を求めるか。中尾氏には、歴史における「考察」とは何か。山本氏には、「課題」及び「解決」とは何を指すのかといった質問がなされた。泉氏は、様々な見解を踏まえ判断・決定する、解決に向かうプロセスを評価すると回答した。歴史は原因究明、公民には価値判断を求め、その点で連携を目指すかと解答した。中尾氏は、事実間の繋がりを捉え、歴史的事実を可変的なものとして追究し捉え直すことが歴史における考察であると回答した。山本氏は、「課題」として論争的であること、価値のレベルを含むことを要素として、さらに社会のあり方など抽象度の高いものも含まれると述べた。「解決」とは方向性であり、第三者的視点からの批評にとどまらないことを指すと述べた。こうした質疑応答を基に、会場からも多数質問があり、活発な議論が展開された。各科目における「課題」とその「解決」、「考察」「構想」のあり方、社会系科目としての連携と棲み分けなど、重要な論点が示されたシンポジウムであった。